

筆者が神学生の頃、尊敬していたM教師が口癖のように言っていたのは、「一部をもって全体と考えるという誤りの危険」だった。相手の中に誤りや受け入れ難い点が見えた時、それをもって相手全部を否定／拒否し、そこに含まれていないはずの真理をも捨て去り、対話や交流を断ってしまうことへの警鐘であり、同時に自分とは立場の異なる考え方や神学の中にも、必ず何がしか聞くべき真理が含まれていることを教えることばであった。

筆者の生まれ育った教会と所属する教団は、J E Aに属する福音派教会の中でも比較的幅の広い、多様性に富んだ伝統と気風を有している。かつて新生した前後、当時の福音派諸教会に吹き荒れた聖書論論争や聖霊論論争の強風にもまれる経験をし、同時に所属教会の分裂や争いの渦中に置かれた。生まれたばかりの乳飲み子としてはおよそ過酷な環境の中で苦悶する中、福音的であるとはどういうことか、堅持すべきものとそうでないものを見極めはどのような基準ですべきなのか真剣に考えさせられたことを、M師のことばは筆者に思い出させた。そして、母教会と母教団にその一員として置かれた摂理を肯定的に受け止め、福音的立場を堅持しつつ、決して狭い閉鎖的立場に自らを閉じ込めないようにすることが、その後の筆者の課題となった。

1990年4月、新米牧師として牧会伝道の荒波に漕ぎ出した。それから5年目、所属教団立の神学校で新約学の科目を担当するよう命ぜられ、新約通論はともかく、新約緒論で何を教えるべきか思案にくれていた頃、G・ラッド著「新約聖書と批評学」(聖恵授産所出版部、1991年)に出会った。これは、まさにあのM師が力説していた真理(格言?)を、ラッド教授が新約学の分野でリベラルな聖書批評学を相手に実行した本であり、読み進めるにつれその画期的内容に心が震えた。曰く、現代福音派の聖書学はリベラル神学から多くの恩恵を受けており、その事実を知らずにリベラル批判一辺倒と対話の拒否にとどまってはならない、選択的にその神学的成果を受け入れ、そこから学び、対話を継続し、広い視座に立って福音的立場をより堅固に構築するべきである、と。この書を軸に、福音的聖書批評学を学ぶクラスを立ち上げることにしたのは自然な成り行き、いや主の導きであった。

以来、約10年の歳月が流れ、2004年9月よりJ E A神学委員に加えられて、原理主義と福音主義の共通点と相違点を研究調査する機会を得た。携わってみてわかったのは、このキリスト教原理主義への対応とはまさに、何が本質的事柄で何が枝葉末節の事柄なのか、両者を峻別した上で受容と対話を継続するセンスを獲得する、そうした全教會的必要性を明らかにすることだという事実である。筆者が新生した頃、福音派内に存在したあの論争の数々は、そうしたセンスを身につけるため福音派に摂理的に与えられた、いわば産みの苦しみだったのではないかと思う。あのM師の格言を活かすべく、新約緒論のクラスを担当し続ける中、果たして福音派諸教会はそのセンスを地方教会の信徒レベルで身につけて来たの

か、大いに考えさせられる10年であった。

そして昨今の米国を中心とするキリスト教原理主義の問題である。調べてみて驚いたのは、この問題を正面から扱っている福音派からの日本語文献がほとんど皆無であること（だから神学委員会で小冊子を発行する必要があるのだが）、その結果として当然のなりゆきとも言えるが、米国直輸入の原理主義的傾向を帯びた文書が、健全な議論や検証を経ないまま、諸教会に流布している憂えるべき現状である。そして、主流派（リベラル）による米国キリスト教原理主義批判は当然としても、同時に主流派の低迷と凋落への危機感が主流派内部で高まっており、福音派の台頭に脅威（ある種の敬意も）を抱いていることも、数十年前では考えられない現実である。よって、今日本の福音派がキリスト教原理主義の問題をいかに扱い、その課題を克服して、健全な福音の拡大と教会の成長にどう寄与するかは、福音派諸教会に共通に課せられた、重大な責任であると言える。M師の預言的格言は、これからますます実行されるべき課題になるのではないかと思う。

変えてはならないのが健全な福音の真理であることは言うまでもない。主流派に属しつつ、福音派に一定の評価を与え続けてきた稀な存在である古屋安雄氏は、近著「キリスト教国アメリカ再訪」（新教出版社、2005年）で、主流派は自己批判をして謙虚に福音派の教会や神学から学ぶことで、キリスト教信仰の確実性を回復しなければ回復の道はないとの驚くべき主張をしている。その上で氏は、原理主義を克服した福音派が信仰の確実性を保持しつつ、主流派が志向した社会的関心を継承することのほうが、キリスト教会回復の可能性としては高いとも付け加え、主流派への失望感を募らせている。その一方、同書で古屋氏は、福音派とキリスト教原理主義をほぼいっしょくたに扱い、ステレオタイプの批判をしているが、そこで挙げられている批判は決して真実そのものでも解決できない課題でもなく、要はこれからの我々福音派の努力と姿勢にかかっているということである。

キリスト教信仰の確実性の回復が、教会を回復する。まさにこれは福音派が願い、また堅持してきた確信であり、それを、原理主義的傾向を払拭あるいは克服しつつ実行していくことが、今の私たち福音派に求められている。この機会を逃すことなく歩んでいきたい。

以上